

関連学会印象記

10th International Congress of Therapeutic Drug Monitoring and Clinical Toxicology に参加して

井 尻 好 雄*, 加 藤 隆 児*

2007年9月9日～14日までの6日間、Pierre Marquet 会頭のもとフランスのニースで 10th International Congress of Therapeutic Drug Monitoring and Clinical Toxicology が開催された。演題は口頭およびポスター発表合わせて約 300 題、うち日本からは 16 題のエントリーがあった。また、16 のワークショップが開催された。今回我々は、臨床薬剤学研究室の学生 3 名、秘書および大阪大谷大学薬学部の廣谷芳彦教授らとともに本学会に参加した(図1)。

本学会は 1988 年に田中一彦先生らにより創設され、臨床における薬物血中濃度モニタリングの草分け的存在になる学会であり、学会誌は Therapeutic Drug Monitoring (TDM) である。学会の正式名称は、「International Association of Therapeutic Drug Monitoring and Clinical Toxicology」であり、この名称は本学会のモチベーションの高さを示している。

すなわち、TDM は効果を追求するためだけに使うツールではなく、副作用をもモニターすべきであることを訴えているからである。

今回の学会はニースというフランス第 2 の都市で行われたが、人口は約 35 万人で日本でいうところの沖縄? のようなリゾート地に当たり、コート・ダジュール(紺碧の海岸線)と呼ばれている。学会の合間に、ニース、モナコ、エズなどの地区を散策し、かなりこの地と親しむことができた。ニースは 1 週間滞在していたため、下町の小さな路地など現地の人しか行かないようなところを散策する機会があり、古くから開いているテーブルクロス店のご主人(フランス語しか話せない)にニースの町のことを色々教えていただいた。ニースの町のヒトの印象は、フランス人らしく自分に自信をもっているが、他人への干渉はあまりしないという感じを受けた。しかし、車には少々驚かさ



図1 関西国際空港にて

*大阪薬科大学臨床薬剤学研究室

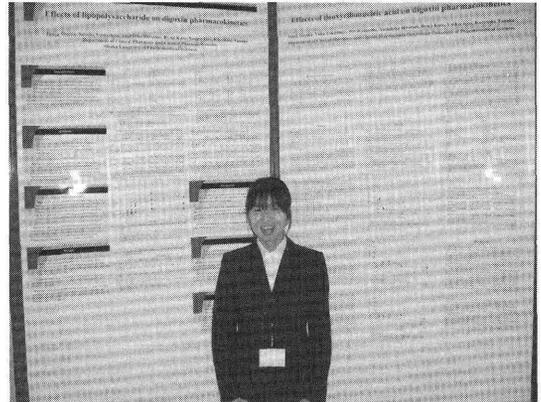
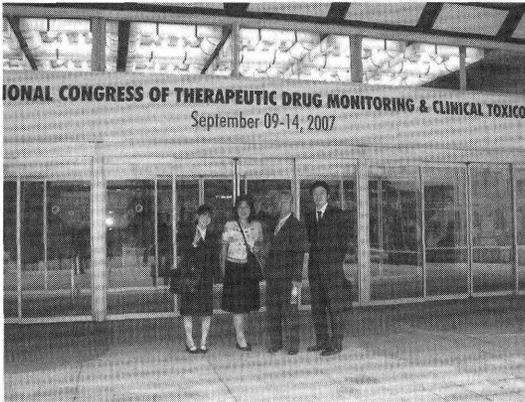


図2 学会会場にて(右: S. Tanaka)

れた。細い道路をかなりの速度で走るのであるが、その道路は一方通行でも必ず二車線あり、一車線は必ず駐車用の車線となっていた。その車線に駐車している車と車の距離は前後とも数 cm であり、出発時には、前後の車を押し出さなければならない状態である。したがって、車は傷だらけで、日本では想像できない状況であった。このような状況を目の前にしながら、オープンカフェが多くあり、多くの人々が店の外で食事を楽しんでいた(店の中は空いている)。モナコ(フランスではない)は、F1 グランプリの開催地として有名であり、グレース王妃でも有名な土地であるが、モナコ駅や町の様子(車はピカピカで駐車している車と車の距離もコースと違い数十 cm あった)は色々なものがセブであるように見え、お金持ちの国だと感じた。さらにエズ村(「鷲の巣村」と呼ばれている)は、標高 427m の険しい岩山の頂上に造られており、頂上からの景色は感動的であった。海岸の断崖絶壁の天辺にある村(地中海からの敵の襲来を見張るためなのだろうか)で、村内は車は勿論、バイクすら入ることのできない、まさに天空の村であった。

さて、学会であるが、先ず、我々の発表について述べる(図2)。今回は以下の4演題をポスター発表でエントリーを行った。エントリー No. 253; 守田淳哉(修士2年次生), 演題; Effects of lipopolysaccharide on digoxin pharmacokinetics, No. 254; 田中早織(修士2年次生), 演題; Effects of deoxyribonucleic acid on digoxin pharmacokinetics, No. 255; 中川真知子(修士2年次生), 演題; Effects of lipopolysaccharide on intestinal P-glycoprotein expres-

sion and activity, No. 256; 加藤隆児, 演題; The relationship between urobilinogen and increased digoxin-like immunoreactive substances (DLIS) in human urine. 守田は、digoxin は炎症により吸収率が上昇し、2-コンパートメントモデルの α 相が有意に縮小することを報告した。田中は、守田と同様のことが大腸菌由来 DNA でも起こり得ることを報告した。中川は、P-glycoprotein が lipopolysaccharide による炎症により、消化管での吸収が変動する可能性を指摘した。加藤は尿中のウロビリノゲンを digoxin として誤って測定すると報告し、腎不全患者に存在する DLIS の一部に urobilinogen である可能性を指摘した。今回の発表では D. Touw 先生が chairperson となり、ポスターの前でプレゼンテーションを行った(図3)。発表後のディスカッションでは、身振り手振りを交えての必死のコミュニケーションではあったが、多くの示唆に富むご意見を頂き、貴重な経験をすることが出来た。

次に、学会全体の演題であるが、本学会では、製薬メーカー(Roche や Abbott など)や測定機器企業(DADE BEHRING や Waters など)からの新しい測定法のデモンストレーションをはじめとして、その測定法に関連した臨床研究の発表が多く見られた。ターゲットは、免疫抑制剤(シクロスポリン、タクロリムス、シロリムス、ミコフェノール酸モフェチル)、抗 MRSA 用剤、一部モルヒネなどの麻薬の TDM などであった。さすがに、最先端技術の発表や移植医療関連(特に、日本でも使用されている免疫抑制剤のミコフェノール酸モフェチルについての演題が多くあった)の発表が多くあった。

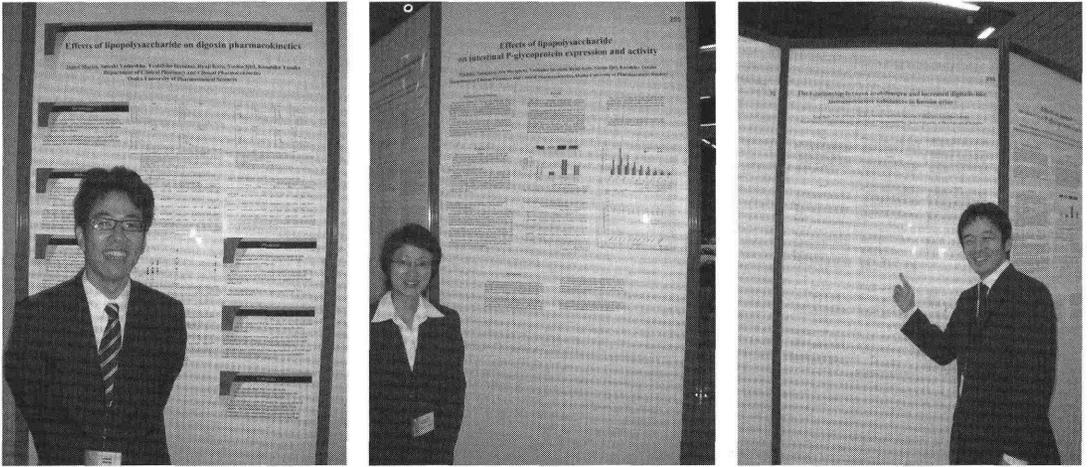


図3 ポスター会場にて(左から J. Morita, M. Nakagawa, R. Kato)

しかし、反面、世界 20 ヶ国以上の国々が参加しているせいか、時折、日本 TDM 学会年会で 10 年以上前に発表されていた研究テーマについて発表している場面にも遭遇した。

学会最終日の夜には、ニースの海岸で Gala Dinner が開催された(図4)。開始は 20 時からであったが、日が長かったため、まだ外は明るかった(日の入りは 9 月で 20 時過ぎである)。20 時から 2 時間はウエルカムドリンクのみしか出されなかったため、本当に食事が出てくるのか日本人参加者の間で不安を感じた一幕もあった。その間、ジャズの生演奏も行われ、とてもにぎやかで楽しい dinner であった。22 時過ぎにようやく食事が出されたため、Gala Dinner 自体は翌日の未明まで続いた。我々は次の日の朝が早かったため、途中で切り上げることとなった。Gala Dinner は多くの国の方が参加されていたこともあり、日本人のみならず様々な方と交流を持つことが出来た。

最後に、日本 TDM 学会は、薬物動態学系に歩み始めているように感じているのであるが、本学



図4 Gala Dinner にて

会は、測定、分析、薬物動態、臨床研究、トキシコロジーなど多彩な分野の報告があり、国際色豊かな学会であった。我々自身も、海外の本分野での研究の進歩を少しでも把握できた、と感謝する次第である。